

宇佐地方の

古い文化を学ぶ会に参加して

市野瀬

仁

(会員・佐伯市長島)

佐伯史談会の年中行事の一つとして、県内の研修地は宇佐地方ときまった。宇佐風土記の丘・御許山おもとさん(六四七畧)が主たる見学場所である。六月七日(火曜・晴)・大手前発七時四十分の貸切バス。参加者二十名(男一・女九)となった。

私は学校を退職したら宇佐には大分師範の同級生もいるので、いつか史蹟を案内してもらおうと考えていた。

宇佐神宮には毎年奉納吟があるが、神宮の境内にあるといわれている弥勒寺跡も知らず、いくつかの疑問をもちながら今日まで過ごしてきた。宇佐神宮の奥の宮といわれる御許山は、佐伯市柏江の出身青木猛比古が、県下の勤皇の志士六〇余名と共に、討幕の旗上げをした世にいう御許山騒動の山でもあった。が、まだ登っていない。また、宇佐風土記の丘にも行ってない。未知のものを解決してくれるこの小旅行に熱い期待をもって参加させてもらった。

出発期のせまった頃、御許山(六四七畧)の山道にはマイクロボスは登れないことがわかり登頂に要する時間が問題となった。このことを清田先生から聞いたので、宇佐の同級生と電

話で情報をつかみ仲介の労をとった。けれど参加会員に婦人や年輩の人が多く登山は中止となった。

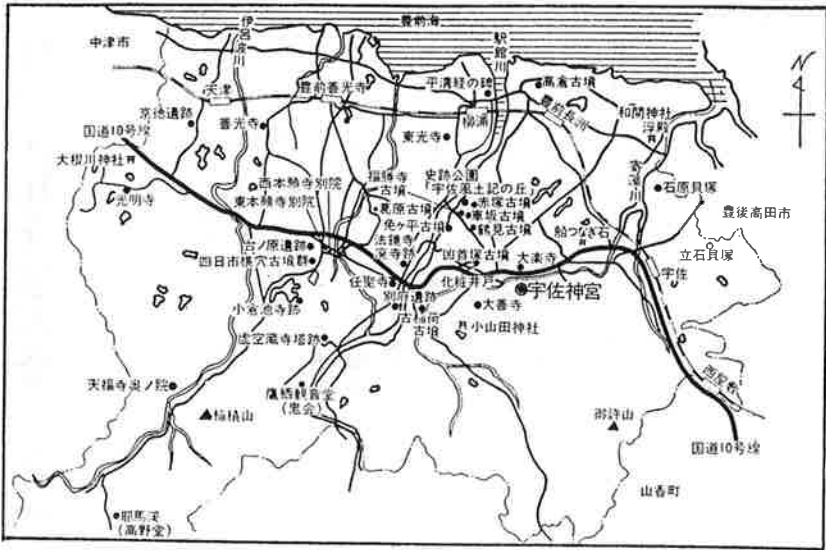
中止決定後、当日のスケジュールを同級生の池田光穂君にお願いした。池田君から蟻木生治君も案内に加わるといふ連絡があった。専門のガイドも備ったという。退職後二年目の両君は、宇佐市の教育委員会の仕事をしている。両君とは二十数年ぶりの再会である。

佐伯から宇佐までの三時間余のバスの中で、見学場所に関する参考資料をプリントで用意してきたので、予習の時間をもらった。

懐しい友人と専門のガイドに迎えられ、「宇佐風土記の丘」に着いたのは予定の十一時頃であった。長い教職生活で鍛えられた友人の顔には、それなりの年輪を感じた。高木会長、清田副会長、古藤田研修部長等と挨拶を交わして館内を見学した。

館内では、宇佐と国東の六郷満山との関連が多角的に展示されているのが印象的であった。宇佐神宮参道の右側に弥勒寺跡

宇佐市内の主要文化財分布図



が図示されているのを見て、その大きさに驚き位置が確認されてうれしくもあった。中食を終えて、久しぶりにお会いする藤原正教館長にお礼をのべて玄関へ出た。

「宇佐風土記の丘」の建設は、宇佐市の田園都市建設と大規模圃場整備事業の作業に関連しておきたものであった。昭和四十四年、駅館川下流の右岸東上田の弥生前期から中期にかけての大集落や、多数の土壇（墓地）が開発作業によって破壊されてしまった。これは、大分市の御陵古墳が住宅団地造成のため、県の開発公社により全面的に破壊されたことと共に、県内重要遺跡の二大破壊事件として、「開発と文化財」の問題を世になげかけたものであった。

「宇佐風土記の丘」より周防灘に臨む駅館川下流の平野部は、縄文後期（二三〇〇年以前）は海岸部であった。宇佐市は古代より遺跡の宝庫といわれている。中でも、「宇佐風土記の丘」より内陸部に当る川部、高森地区がその中心といわれている。したがって、この丘は古代文化の足跡を一堂に見られる絶好の位置に建っているといえてよい。それを象徴しているように丘の前方に、九州最古の赤塚前方後円墳（県指定）が見える。この古墳を耶馬台国の卑弥呼の墓とする説もあるが定説ではない。

一行は古墳の上の草むらを踏みわけて、思い思いの感慨にふけり、語り合っていた。ときおりガイドの説明も聞いた。御許山（六四七尺）はどの山かね、と池田君に聞くと、左方に見える遠く高い山を指してあの山だ言う。この一行の顔おれなら中止もやむえなかつたと思った。

「宇佐風土記の丘」と書かれた碑の前で、同級生三人の記念写真を

搬った。

池田君は御許山騷動のとき、勳皇の志士が密会した家で、家主の時枝栄太氏が、当時の状況を説明してくれることになっている。約束の時間まで虚空蔵寺塔跡（奥指定）に行こうと言った。パスは広い宇佐平野の田圃の中の道を使った。池田君は「田圃の中に見る小山状のコンクリートの塚は、宇佐海軍航空隊の掩体塚です」とアナウンスした。佐伯には、この種の独立した塚は元航空隊飛行場で現在の興人敷地（東浜）内にしか見られない。しかし、佐伯の人にはすぐわかるはずである。しばらくして、「道のすぐ右手の草におおわれた小山が古墳です」と池田君がアナウンスした。葛原古墳（五世紀・国指定）の標識が立っている。

バスから下りた一行は、田圃の中の小道を歩いて目的の虚空蔵寺跡（奥指定）の心礎に集りガイドの話聞いた。直径一桁ほどの丸い石の中に丸くくりぬいた穴がある。三重塔の中心の柱穴である。塔の高さ八〇尺（二四・二四桁）と推定されている。心礎の周囲にも平たい石がいくつか敷かれている。この寺は七世紀から十世紀頃のもので、金堂、講堂、中門、南門のある法隆寺式伽藍であった。川原寺系軒丸瓦・忍冬唐草文のある法隆寺系平瓦・新羅系平瓦と埴仏（小タイル状の独尊仏）が出土された。

七世紀から八世紀の奈良時代は仏教文化全盛の頃であった。

当時、駅館川をはさんだ宇佐平野の地に大伽藍がいくつか配置されていた。虚空蔵寺・法鏡寺（国指定）弥勒寺そして宇佐八幡宮等。そのスケールの大きさは想像の域をはるかにこえたものであろう。莊嚴であり、莊重であり、莊麗であった。その空間のあちこちに、夕餉の煙が細く立上る貧しい茅葺の家へ、静かに寺の鐘の音が流れてくる。御許山の空を赤く染めていた夕焼はすでに薄く黄色につつまれた。寄藻川を流す御許山、伊呂波川を流す稻積山（四〇八桁）は共に巨石のある神体山。両川の水が注ぐ周防灘には、畿内大和の地を往来する船が浮んでいる。今から千二百数十年前の宇佐の風景である。

一行を待っている時枝栄太氏の家系は名家である。蟻木君には従兄に当る関係である。氏はある銀行の頭取をした方で、七〇才をすでにこした人。慶応四年におきた御許山騷動の首謀者佐田秀・長三洲の言動や、青木猛比古の情報収集する京都での行動も、この人には身じかにあるらしく、話もくわしく具体的にである。ただ身体のごうで、真剣に話すわりに、こちらに意志が十分に伝わらないのが残念であった。時間もかなり過ぎた。

パスは宇佐神宮の勅使街道といわれる旧国道の横に面した百体神社の前で停った。

百体神社の案内板にはこう書かれてある。「大隅、日向の隼人の霊を祀る。養老四年（七二〇）八幡大神は隼人征伐に行幸になり御帰還の時百個の隼人の首を持ち帰り、後に祀ったのが

この神社と云われています。放生会ほうじょうえはこの単人の霊を慰め悪を更生させる神事で百人の霊を祀っているから百体神社という」と。

単人征伐のがいせんの翌年、ホウソウの病災が相次ぐので人々はたたりだと思った。体全体のブツブツが且の一種の鱧ニナに似ていることから、海水とニナを百体社に祀り和間海岸の浜に流すならわしとなった。これが今も続く放生会の始りである。鱧木君は放生会と関係が深い家柄で、鱧木村の鱧木の姓を持つ名家の生れ。時枝氏と同じく宇佐氏一族の末裔である。

宇佐八幡宮の大鳥居の手前から池田君は、道を左に折って、官司ごうしの到津家とうしんけの離れの庭に案内された。一行はやゝ緊張しているようであった。官司は上京中であつた。若い奥方が顔を見せ、香り高いお茶をいただいた。到津家の離れはもと勅使のもてなしに使われた所で、宇佐の名家といわれる時枝氏も始めてのことという。それに一行が入れたのにはわけがあつた。池田君が官司の子供さんを小学校かで教えたのが縁となり、訪問が許されたという次第である。教師冥利につきる話し。広く落ちついた庭園で記念写真を撮つた。

参道から頂上までにある燈籠は江戸時代のもので、境内には百二十基ばかりある。これ等の燈籠を厳密にいうと三様式に分類されているが、総じて宇佐燈籠と呼ばれている。

国指定の天然記念物イチイガシ林に包まれた亀山の頂上に国宝宇佐神宮本殿がある。折角のことだから本殿内に入り権官司

から社殿の説明を聞く。後、巫女(みこ)の舞、権官司からのお扱い、御神酒をいただいた。規定によるお礼を差上げた。

下山して、権官司より弥勒寺跡に案内していただいた。さきの「宇佐風土記の丘」で場所は知つたが現場に来ると気がちがう。草むらの中に礎石がいくつも見える。

弥勒寺は奈良時代から江戸時代まで存在した長い歴史を持っている寺であつた。天平十年(七三八)、東大寺の大伽藍や国分寺の創設前に、聖武天皇の勅願によって日足の南無江から八幡宮境域に弥勒寺は移築された。さらに、東大寺の建立に當つて朝廷から宇佐八幡の託宣を求められた。こうして宇佐八幡宮の支援があつて東大寺は成就したのである。権威と力のほどがこれをもって知られる。

伽藍は薬師寺式で、金堂、講堂、東塔、西塔、南門、輪藏(経藏)の遺構が確認されている。出土品として、法隆寺系平瓦と大宰府系平瓦と丸瓦がある。この荘大な弥勒寺跡の発見のきっかけが貴重である。中山平次郎博士(九大医学部教授)は、大正五年考古学雑誌にのせられた森弘氏の弥勒寺古瓦の一枚の拓本を見て、弥勒寺跡の調査をはじめられたというのである。

虚空蔵寺跡発掘の昭和二十九年の翌年、昭和三十年から五ヶ年の本格的調査によつて、ほぼ全貌が明るみに出て世の注目をあびた。その結果この寺は焼亡と建立のくり返しにより、古瓦の編年が確立した成果は極めて大きい。弥勒寺の興亡史は宇佐八幡宮の興亡の歴史と云われてきたことも、古瓦の編年史がよ

き証人となったのである。

宇佐神宮は神功皇后と応神天皇母子と、宇佐の神（比売大神）が祀られている神宮である。さらに神宮の特色を分りやすく「宇佐―大陸文化と日本古代史」賀川光夫編よりひろいあげてみたいが、紙面のつごうにより略すことにする。

宇佐市の現代的課題は、農業の振興と文化財保護にあると市政方針でのべている。前者はさておき後者についてみよう。

昭和二十八年、大分大学の富来隆教授は耶馬台国は宇佐にあったと発表した。方位や里程を軸とし、合わせて弥生時代の遺跡や大規模な古墳群のあることを根拠とするもので、これを支持する数人の学者もいる。さらに、卑弥呼の墓が宇佐神宮のおわす龜山であるという説も聞かれる。つまり龜山古墳というわけだ。

宇佐市は昭和五十一年、「宇佐市文化財保護宣言都市」を宣言した。同年、民間の「明日の宇佐観光を考える会」は「新耶馬台国建設公団」を設立した。翌五十二年、「明日の宇佐観光を考える会」の主催で、専門の学者を招き、「古代宇佐文化シンポジウム」を四日市文化センターで行った。その後も回を重ね、市民に誇り高い宇佐文化の認識と文化財保護を啓蒙している。

世は文質文明のあまりの進歩に危惧さえ感じはじめ人間主体の精神文化を求めんとしている。また、中央を仰ぎ見るだけで

なく、地方の良さを発掘し、その土地の特性を活かす運動が始まっている。いわゆる地方の時代だ。京都や奈良が日本の宝であるように、宇佐も、一地方都市にあって古代の歴史文化をもつ日本の宝である。

百数十億円を投入した大規模圃場製備事業により、長さ百畝幅三十畝に統一された美田。さらに幅十六畝の大幹線の農道が東西に一本、南北に四本を貫いて走る。実に碁盤の目のように美しい県下一の穀倉地帯の宇佐平野である。農業の振興を市政の頭にかかげているのもけだし当然とはいえ、傍目にもうれしい。古代の農村風景を想起させ、古き歴史文化が息づいている。ここに、宇佐の個性と魅力がある。

現代人は一面素朴さを求めている。宇佐の新民謡にこんながある。

宇佐はよいとこ

人情もおおるコリヤサ

古代文化のヤレ花も咲く

ソーチコナー ソーチコナー

宇佐はふるさとエー

ソリヤー ヨイトコナー

註「ソーチコナー」そうだなアの

宇佐方言

県南のはて佐伯市から「宇佐地方の古い文化を学ぶ会」として、この地を訪れたが、今日の半日は古代宇佐文化の代表的な四、五ヶ所に立停ったに過ぎなかった。それでも、宇佐の多くの人の好意により深い感銘にひたることができた。古い文化を学ぶことは、印象や感銘をそのままにせず、家に帰って反芻し、整理し、その裾野を調べ汗を流さねばならない。その行為によってさらに興味もわき、意欲もおき、愛情が湧いてくるものと思う。学ぶということは、そんなものではなからうか。

佐伯に帰り着いたのは予定時間を一時間ほど過ぎ、八時頃であった。

宇佐の地の古き歴史をたずねきて

家路に思う友の面影

参考資料　。宇佐 賀川光夫編　。大分合同新聞　。宇佐市観光協会　。宇佐市商工観光課　。日本歴史大辞典　。大分県地名大辞典



会員の著書紹介

『佐伯文庫の残存本』

梅 木 幸 吉 著
(別府大教授)

昭和五十年に『覚書・佐伯文庫』として佐伯藩八代藩主高橋公創設の藩文庫「佐伯文庫」について、六年がかりの研究を発表され非常な反響を呼んだが、続いて五十四年にこれを増補改訂され『佐伯文庫の研究』として刊行された。

佐伯文庫の研究に専念して、意欲的に取り組まれている氏は、更に引続いて喜寿記念の意味も含めて標記『佐伯文庫の残存本』を刊行された。

書誌学的に高く評価されている佐伯文庫も各地に散在していて、これをここまで纏められる事は、大変な労作であったと思われる。特に残存本については一層その感を深くする。

残存本の種類、各書の内容及著者についての解題を施し、尚長沢・阿部両氏の書誌学的解題を補って刊行され、既に名著として高い評価を受けている。

著者は更に佐伯文庫についての進んだ研究を刊行される計画をもって居られる。

史談会文庫の中にも載いているので、会員に是非一読をおすすめしたい。

(清 田)